

シェークスピアにおける動名詞

野中, 響子
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6786957>

出版情報 : 九大英文学. 32, pp.253-267, 1989-11-20. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



「シェークスピアにおける動名詞」

修士1年 野 仲 響 子

0. はじめに

動名詞は、元来純粋な抽象名詞であり、名詞の統語的特徴を全て備えていたのであるが、やがて ME 期になると、その名詞的性質を保持しながら、本来動詞に属する性質、つまり動詞的性質を帯びるようになっていった。動名詞が、それ以降現在に至るまで徐々に発達させて来たと思われる動詞的性質は次の5点に集約される。

- (1) 前置詞の介在なしに直接通格の目的語をとることができる (e.g. In *following him* I follow but myself—Oth 1.1.58)。
- (2) 補語をとることができる (e.g. What, for *being a puritan*—TN 2.3.137)。
- (3) 副詞的付加語をとることができる (e.g. The images of revolt and *flying off*—LR 2.2.263)。
- (4) 複合形を用いて「完了時制」や「受動態」を表わすことができる (e.g. 'Twill weep for *having wearied* you—Tmp 3.1.19; By *being* seldom seen—IH4 3.2.46)。
- (5) 意味上の主語を通格でとることができる (e.g. Journeys end in *lovers meeting*—TN 2.3.42)。

動名詞の発達の歴史的な鍵は ME 期にあるが、ME 期の動名詞に関しては、すでに田島 (1985) が統合的かつ詳細な記述を展開している。以下、田

島 (1985) を踏襲しながら、小論では、シェークスピアの12作品を通して、初期近代英語における動名詞の発達状況をみていく。従って、彼が ME のデータから判断し、“ME 後の時代に対する予言”という形で述べていたいくつかの点を実証することにもなろう。調査に用いた作品は次の通りである。略称は Onions の *A Shakespeare Glossary* による。

Ham	Hamlet
1H4	The First part of King Henry IV
2H4	The Second Part of King Henry IV
JC	Julius Caesar
LR	King Lear
Mac	Macbeth
MV	The Merchant of Venice
Oth	Othello, the Moor of Venice
Rom	Romeo and Juliet
Tmp	The Tempest
TN	Twelfth Night
WT	The Winter's Tale

1. 動名詞の目的語

動名詞は本来名詞であったためにその意味上の目的語は OE 期には主に属格で表わされた。後に ME 期になると、属格に相当する of-phrase でも表わされるようになり、14世紀からは、これに加えて通格の目的語もとるようになった。その結果、シェークスピアの時代には次の6つの型に大別される。

A = 目的語属格 + 動名詞 (e.g. Stand, good Fate, to *his hanging*—Tmp 1.1.29)

B = 目的語 + 動名詞 (e.g. At *grave-making*—Ham 5.1.66)

C=動名詞+of+目的語(e.g. *Leave wringing of your hands*—Ham 3.4.33)

D=決定詞+動名詞+of+目的語(e.g. *to the hearing of anything good*—2H4 1.2.70)

E=動名詞+目的語(e.g. *In following him*—Oth 1.1.58)

F=決定詞+動名詞+目的語(e.g. *in the acting it*—Rom 4.1.120)

このうち A、C、D は名詞的性質が強く、E と F は、前置詞が介在することなしに直接通格の目的語をとるという点で動詞的性格が強いと言える。そして B は文脈に応じて名詞的にも動詞的にもなり得る、いわば名詞的なものから動詞的なものへの過渡期の型とも言うべきものである。次の表 1 は、シェークスピアの作品におけるこれら 6 型の分布状況を表わしたものである。

表 1

A	B	C	D	E	F	Total
7	25	23	38	155	21	269
(2.6)	(9.3)	(8.6)	(14.1)	(57.6)	(7.8)	(100%)

これによると、C の「動名詞+of+目的語」よりは D の「決定詞+動名詞+of+目的語」、F の「決定詞+動名詞+目的語」よりは E の「動名詞+目的語」というように現在普及している二型、D と E の頻度がこの頃すでに高くなっている。特に E の頻度は著しい。次の表 2 は、田島(1985, p. 39)によるもので、1450年から1500年の間に書かれた文献における、動名詞の目的語の各型の分布状況を示したものである。

表 2

A	B	C	D	E	F	Total
(4.4)	(6.1)	(33.5)	(35.4)	(19.6)	(1.0)	(100%)

先の表 1 と比較してみると次のようなことがわかる。シェークスピアにおいては、C の「動名詞+of+目的語」と D の「決定詞+動名詞+of+目的語」、特に C が著しく減少し、E の「動名詞+目的語」と F の「決定詞+動名詞+目的語」、特に E が著しく増加しているのである。Visser (HS, § 1120)

は、初期近代英語期の最も一般的な型は C の「動名詞+of+目的語」であると述べているが、ここでは状況が異なっている。それを実際の割合で見ると、1450-1500年においては、前置詞 of を伴う迂言的な目的語(つまり C+D)の割合が68.9%であるのに対して、直接目的語をとるもの(つまり E+F)は20.6%である。ところが、シェークスピアでは前者が22.7%、後者が65.4%となっているのである。従って、1500年からシェークスピアまでの約100年の間に、of-phrase による迂言的な目的語と直接目的語の立場が逆転したと言うことができる。

しかし、逆転したとは言っても、先の2つのタイプの目的語が一つの文の中に並立する興味深い例も見られる。

Thou art so fat-witted with *drinking of old sack*, and *unbuttoning thee* after supper—1H4 1.2.2—3.

for thou variest no more from *picking of purses* than *giving direction* doth from labouring—1H4 2.1.50—51.

以上のことから、次のような結論に達することができる。統計的にみると、シェークスピアにおいては、直接目的語の割合が of を伴う目的語の割合よりはるかに高い数値を示しており、この点では、動名詞がその動詞的な性質を充分発達させていると言える。しかしながら現代と比べると、用法はかなり揺れており、依然として過渡期の状態にあるのである。ここでは、通格の目的語を従えることによって A~F の中でも特に強い動詞的な性質を持つ、E と F に限定して話を進めることにする。

E の、「動名詞+目的語」という直接目的語を従える構造は、Jespersen (MEG, V, P. 116) によると14世紀に始まる。彼は、その主な理由として、現在分詞と動名詞が形態上は同一であるということや、フランス語からの影響を挙げている。Visser (HS, § 1123) もまた、それは目的語を伴った分詞からの類推によるものだと言っている。田島(1985, p. 74)によると、Jespersen の初出例よりも約一世紀さかのぼる1300年以前にその例を見つけることができるものの、1400年までは極めてまれである。が、1400年以降は徐々に増加して

行き、ME 後期の15世紀半ばには、まだ一般的な型とまでは言えなくても、その後の時代においてはこの型が他をしのぐであろうことが、充分に予測され得る状況となっていると述べている。その一世紀後のシェークスピアにおいては、その予測通りこの型が全体の57.6%を占め、圧倒的に優位である。ここで、いくつか典型的な例を挙げてみるが、例の中には目的格補語または副詞的付加語を共にとっているものも多く、この構造がこの時代すでに現代の用法とほぼ同じ程度に発達していたことがわかる。

In following him I follow but myself—Oth 1.1.58.

for fear of opening my lips—JC 1.2.250.

by doing everything safe toward your love and honour—Mac 1.4.

26.

by bidding me taste my legs—TN 3.1.79.

for bringing wood in slowly—Tmp 2.2.16

by leaving me now—WT 4.2.11.

F は「決定詞＋動名詞＋目的語」構造であるが、これは前置詞の介在なしに目的語をとるという点では動詞的だが、一方、*the* 等の決定詞が先行するという点では名詞的であると言え、両方の性質を備えている。Onions(1971, p. 122) は、この構造は初期近代英語の特徴であると述べており、現在の用法では決定詞が所有代名詞である場合以外は極めてまれである。シェークスピアにおいては21例を見つけることができたが、決定詞として *the* をとるものが最も多く14例を数えた。その他の決定詞の種類としては、形容詞、指示詞等が挙げられる。ここで典型的な例をいくつか示す。

in the acting it—Rom 4.1.120.

This sudden sending him away—Ham 4.3.8.

a good kissing carrion—Ham 2.2.183.

Jespersen(MEG, V, § 9.3.3) は、この構造は特に *no* の後で頻繁に見られると

説いている。だが、そのような例は、私の調査の範囲では見つけることができなかった。

2. 動名詞＋補語

動名詞が補語をとるという構造は、今日の英語では決して珍しいものではないが、歴史的観点から見ると、比較的最近のものである。この構造に関する歴史的研究は極めて少なく、調べた限りでは、田島 (1985) を除けば Jespersen (*MEG*, V, § 3.10) がほんの少し言及しているくらいであった。田島 (1985, p. 92) によるとこの構造は OE 期には全く見られず、ME 期においても 15 世紀以前には見られない。だが 15 世紀後半の文献には 5 例の存在が確認されているので、この動詞の特徴は 15 世紀から発達したものであると言えることができる。シェークスピアにおいては 15 例を数えた。目的格補語に関しては 9 例見つかったが、これは目的語の項に含めているのでここでは考慮に入れない。以下数例を挙げる。

for *being* more stone than it—WT 5.3.38.

He seems to be the more noble in *being fantastical*—WT 4.4.751.

What, for *being* a puritan—TN 2.3.137.

let him call me rogue for *being* so far officious—WT 4.4.840.

By *seeming cold* or *careless* of his will—2H4 4.3.29.

They call drinking deep '*dyeing scarlet*'—1H4 2.5.14–15.

また、次の例文

Not being the worst stands in some rank of praise—LR 2.2.
431–432.

のように、補語と共に副詞的な付加語（ここでは Not）を伴うことで動詞的特徴を 2 重に強く持つものがある反面、次に挙げるような名詞性をも兼ね備

えた興味深い例も見られた。

after *long seeming dead*—0th 5.2.337.

この例は補語をとっているという点では動詞的であると言えるが、動名詞 *seeming* に先行する形容詞 *long* がその名詞的性格を示している。以上のように、この構造は、シェークスピアにおいてはそれ以前の時代と比べるとかなり発達してきてはいるが、現代と比べるとまだ充分とは言い難い状況である。

3. 副詞的付加語

動名詞は、動詞と普通共に用いられる副詞的付加語をとる場合にもその動詞的性格を明示する。Jespersen (*MEG*, V, § 9.1.1)、Trnka (1930, P. 92)、Poutsma (1923, p. 163)そして *OED* (S.V. -ing)によると、この構造は14世紀に始まり、初出例は、1340 *Ayenbite* (263 ate uerste *guoinge in*)である。しかし、田島(1985, p. 96)は Mossé(1938. p. 105)や Curme(1912, p. 352)と共に1200年頃の例を挙げている。以上のことから、この構造は結局のところ、Mustanoja (*ME Syntax*, p. 575)の言うように ME 初期に始まったものと思われる。

シェークスピアからの資料は大きく分けて3通りに分類できる。

A=副詞を第一要素とする複合語 (e.g. to trash for *over-topping*—Tmp 1.2.81)

B=動名詞+副詞 (e.g. by *speaking too loud*—0th 2.1.267)

C=動名詞+副詞句 (e.g. leave *fighting o'days*—2H4 2.4.233)

A は古くからある名詞的な構造の名残りであり、B、C は動詞性を備えた新しい分析的構造である。これら A、B、C の頻度を表示すると次のようになる。

表 3

A(Compound)	B(with adv.)	C(with adv.ph.)	Total
5	97	71	173
(2.9)	(56.1)	(41.0)	(100%)

3種のうちで、歴史的にはっきりとした競合関係を示すのはAとBである。田島(1985, p. 98)によると、OEに由来するAは1350年頃までは優勢であるが、その後急速に減少し新しい構造のBに取って代わられる。それに対して、Bは先述の1200年頃の例以来のものであるが1300年頃までは稀で、その後徐々に発達し、1350年以降はAを圧倒して行くのである。シェークスピアにおいては、上の表3を見てわかるように、Aはもう完全に圧倒されてしまっている。言い換えれば副詞(句)を伴う型が充分に発達していると言うことができる。ここで、副詞(句)を伴う例のうちから数例を挙げておく。

There is nor *flying hence*—Mac 5.5.46.

in so *entitling* me—WT 2.3.71.

it is the disease of *not listening*—2H4 1.2.123.

leave *fighting o'days*—2H4 2.4.233.

for *giving it to me*—MV 4.1.445.

for *pulling scarves off Caesar's images*—JC 1.2.285.

4. 動名詞の時制と態

動名詞は、元来、時制や態に関しては名詞と同様に中立的であり、文脈に依じてどの「時」でも表わすことができ、形は能動のまま受動的にも用いられた。(現在でもその傾向は多分にある。)やがて、複合形を用いて、即ち「having+過去分詞」の形で完了時制を、また、「being+過去分詞」の形で受動態を表わすことができるようになり、それによって動名詞はその動詞的性質を一段と発展させた。

複合形による完了動名詞がいつ頃から使われるようになったかということに関しては、初期近代英語、特に16世紀末というのが多くの学者¹⁾の意見であり、田島(1985, p. 112)においても ME 期の例は一例も発見されていない。従ってこの構造は、近代英語に入ってから発達したものであり、シェークスピアの時代でも多分ごく稀であろうことが容易に推察される。実際、私が調べた12作品中にはただ一つの例しか見つからなかった。

'Twill weep for *having wearied* you—Tmp 3.1.19.

しかしながら Jespersen (*MEG*, IV, § 7.8.(2)) によれば、シェークスピアの全作品中には今挙げたものを含めて 3 例存在する。他の 2 例は次の通りである。

To let him spend his time no more at home, which would be great impeachment to his age, in *having known* no travel in his youth—The Two Gentlemen of Verona 1.3.14–16.

Mine ears...Do burn themselves for *having so offended*—Venus and Adonis 809–10.

このようにシェークスピアにおいては、複合形を用いた完了動名詞はその発達のほんの初期の段階であり、次の例はそのことをよく示している。これは、ポーシャとネリッサが自分達が家を留守にしていたことを夫に内緒にしておくように言うくだりの台詞であるので、文脈上は明らかに完了時制であるにもかかわらず形態上はそのことを表わすことのできるものを何も持っていない。

No note at all of our *being* absent hence—MV 5.1.120.

なお複合完了動名詞が普及し始めるのは17世紀中頃以降のことである。²⁾ 複合形による受動動名詞について、Jespersen (*MEG*, V, § 9.2.5) や Trnka

(1930, p. 93)は16世紀の終わりに初出すると説く。しかし Mustanoja(1960, p. 573)はそれを15世紀の初めであるとする。この問題に関しては、田島(1985, pp. 114-115)が統括的な言及を行っている。それによると、この構造の初出例は1417年であるが、15世紀でも極めて稀であり、初期近代英語でも More(1478-1535)には全く見られず、Ascham(1515-1568)、Jonson(1572-1637)、Spenser(1552?-1599)そして Shakespeare(1564-1616)にも余り存在しない。発達し始めるのは、1600年頃からである。

Jespersen(MEG, V, 9.2.5)は、この構造はシェークスピアには3例しか存在しないであろうと述べ、The Comedy of Errors 4.3.90、Cymbeline 2.3.134、そして Oth 1.3.136 を挙げている。しかしながら、私が調べた範囲内だけでも次の6例を確認することができた。最後の例は Jespersen の例のうちの一つと同一である。

By *being* seldom *seen*—1H4 3.2.46.
for *being* transported by my gealousies to bloody thoughts and
to revenge—WT 3.2.157.
Scape *being* drunk, for want of wine—Tmp 2.11.52.
but by *being* so retired—Tmp 1.2.91.
in *being* so blest—WT 2.1.41.
of *being* taken by the insolent foe and sold to slavery—Oth 1.3.
136.

このように、シェークスピアには Jespersen が言及しているよりもはるかに多くの例が存在している。

一方、

and who should scape *whipping*—Ham 2.2.532.

のように、能動形のままで受動的な意味を表わしているものは18例であるので、結局、受動的意味を持つものの4分の1が複合形によって表わされてい

るということになる。

「having been+過去分詞」の形による完了受動態に関しては、手許の資料からは一例も見つけることはできなかった。Kisbye(1971, p. 65)によれば、この用法が一般化するのには19世紀以降のことである。

5. 動名詞の主語

動名詞は起源が名詞であるため、その主語は OE の頃から現在に至るまで、通常は属格、または属格相当の of-phrase によって表わされてきた。だが、動名詞が動詞的な性質を備えて行くにつれて、ME 以降、それまでとは違う新しいタイプの主語、つまり通格の主語が姿を見せ始めた。この構造の初出は14世紀であるというのが現代の学者³⁾の意見が一致するところであるが、Visser (HS, §§ 1096–1103)の言及によるとそれは13世紀の初めである。更に田島(1985, p. 123)によれば、通格の主語は13世紀の前半に現われ、目的格(代名詞の場合)の主語の方は14世紀の後半から発達し始める。

この構造が生じて来た理由としては、Jespersen (MEG, V, § 9.4.1)が次の4つを挙げている。

- (1) 動名詞と現在分詞との混同 (i.e. I remember *Tom saying so*)。
- (2) her におけるような属格と通格の一致による混同。
- (3) ある種の代名詞 (i.e. This, That) においては属格形を作るのが不可能であるということ。
- (4) グループを成した語から属格を作ることが不可能であること (i.e. to cut us off from every idea of *the lady and the maid lying together*)。

田島(1985, p. 123)は通格又は目的格の主語を伴った動名詞の構造は ME を通じて非常にまれであると述べているが、シェークスピアにおいても同様である。意味上の主語を伴っている169例のうち、わずかに次の2例が通格の主語をとっているだけであった。しかも最初の例の主語は属格複数と解釈することも可能である。

Journeys end in *lovers meeting*—TN 2.3.42.

You seem understand me by *each* at once her choppy finger
laying upon her skinny lips—Mac 1.3.41–43.

代名詞の目的格を主語としてとっている例文の方は一例も見つけることができなかった。

以上のように、通格、又は目的格の主語を伴うことによっても、動名詞はその動詞的性質を示すことができるが、シェークスピアにおいてはこの構造はまだ一般的ではなく、普及し始めるのは1700年頃からとする Jespersen (*MEG*, V, § 9.4.1)の言及を裏付ける形となっている。

6. 「a+ing」構造

現在ではもう使われていないが、“That came *a-wooing* with you—0th 3.3.72”のように、動名詞が前置詞 *on* の弱形である *a* によって先行された構造がある。これは動名詞の動詞的性質とは直接は関係ないのだが、エリザベス朝期の重要な特徴の一つであるので、この章で扱うことにする。

これまでの研究⁴⁾によると、この構造は後期 ME にはすでにある程度普及しており、特に1500年から1700年の間によく用いられた。(ただし、“While ’tis *a-making*—Mac 3.4.33.”のように *be* 動詞と共に用いられる構造は16世紀の初めまでは稀である。)しかしながら17世紀の後半になると次第に使われなくなり、やがて方言や俗語とみなされるようになっていったのである。

シェークスピアにおいては13例見つけることができた。以下数例を挙げる。

That came *a-wooing* with you—0th 3.3.72.

he falls straight *a-cap’ring*—MV 1.2.58–59.

then the people fell *a-shouting*—JC 1.2.224.

doth lie *a-bleeding*—Rom 3.1.188.

thou’lt set me *a-weeping*—2H4 2.4.281.

I would have him nine years *a-killing*—Oth 4.1.174.

特に次の 3 例は be 動詞と共に用いられているものである。

While 'tis *a-making*—Mac 3.4.33.

Even in their promise as it *is a-making*—Ham 1.3.119.

I killed the slave that *was a-hanging* thee—LR 5.3.248.

弱形である a は脱落することが多かったが、そうすると、ほとんどの場合動名詞か現在分詞かの区別がつかなくなった。中には、“At this instant he is *marshalling of his bull, bear and horse* (Ben Jonson: *The Silent Woman*; q. Kisbye)” のように-ing 型の後の of-phrase から判断できたり、“The church is *building*” 又は “The book is *reprinting*” のように文脈からそれとわかったりするものもあるが、多くの場合、この構造から a が欠落すると動名詞か現在分詞か見分けることは困難である。ただし、このような疑わしい例は、手許のシェークスピアの用例中にはたまたま見つからなかった。

註

※ 小論を執筆するにあたり、種々御指導を賜った田島松二先生に謝意を表します。

- 1 例えば, Trnka 1930, pp. 93–94; Mustanoja 1960, p. 573; Jespersen, *Growth*, § 209.
- 2 Cf. Jespersen, *MEG*, V, §§ 9.2.3–9.2.4.
- 3 Mustanoja, *ME syntax*, p. 574; Kisbye 1971, p. 58; etc.
- 4 See Kisbye 1971, p. 65; Trnka 1930, p. 91; etc.

参考文献

Edition

Shakespeare, William. 1986. *The Complete Works*. Eds. Stanley Wells, et al. New York:

Books and Articles Consulted

- Abbott, Edwin Abbott. 1872. *A Shakespearean Grammar: An Attempt to Illustrate Some of the Differences between Elizabethan and Modern English*. New ed. London: Macmillan. (1st ed., 1869.)
- Barber, Charles. 1976. *Early Modern English*. London: André Deutsch.
- Baugh, Albert Croll, and Thomas Cable. 1978. *A History of the English Language*. 3rd ed. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- Blake, Norman Francis. 1983. *Shakespeare's Language: An Introduction*. London: Macmillan.
- Emma, Ronald David. 1964. *Milton's Grammar*. The Hague: Mouton.
- Jespersen, Otto. 1948. *Growth and Structure of the English Language*. 9th ed. Oxford: Basil Blackwell. [Cited as Jespersen, *Growth*] (1st ed., 1905)
- ...1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. I-VII. Copenhagen: Ejnar Munksgaard; rpt. London: George Allen and Unwin, 1954. [Cited as Jespersen, *MEG*]
- Kellner, Leon. 1924. *Historical Outlines of English Syntax*. London: Macmillan. (1st ed., 1892.)
- Kisbye, Torben. 1971. *An Historical Outline of English Syntax*. Part I. Aarhus: Akademisk Boghandel.
- Mossé, Fernand. 1952. *A Handbook of Middle English*. Transl. by James A. Walker. Baltimore: The Johns Hopkins Press. (Transl. of *Manuel de l'anglais du moyen âge. II. Moyenanglais*. Paris: Aubier, 1949.)
- Murray, James A. H., Henry Bradley, William A. Craigie, and Charles T. Onions, eds. 1933. *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press. [OED]
- Mustanoja, Tauno Frans. 1960. *A Middle English Syntax. Part I: parts of speech*. (= Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki, 23.) Helsinki: Société Néophilologique. [Cited as *ME Syntax*]
- Onions, Charles Talbut. 1971. *Modern English Syntax*. (New ed. of *An Advanced English Syntax* prepared from the author's materials by B. D. H. Miller.) London: Routledge and Kegan Paul.
- ...1986. *A Shakespeare Glossary*. New York: Oxford Univ. Press. Partridge, Astley Cooper. 1969. *Tudor to Augustan English: A Study in Syntax and Style from Caxton*

- to Jonson. London: André Deutsch.
- Poutsma, Hendrik. 1923. *The Infinitive, the Gerund and the Participles of the English Verb*. Groningen: P. Noordhoff.
- Rydén, Mats. 1979. *An Introduction to the Historical Study of English Syntax*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Sugden, Herbert W. 1936. *The Grammar of Spenser's 'Faerie Queene'*. (=Language Dissertations, 32.) Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press for Linguistic Society of America.
- Sweet, Henry. 1891–98. *A New English Grammar, Logical and Historical*. 2 Vols. Oxford: Clarendon Press.
- Tajima, Matsuji. 1977. “14世紀英語における動名詞—その動詞的性質の発達に関して—”『英文学研究』第54巻1・2合併号 pp. 113–133. 日本英文学会。
- …1985. “MEにおける動名詞の統語法的発達に関する諸問題”『英語英文学論叢』第35集 pp. 117–136. 九大。
- …1985. *The Syntactic Development of the Gerund in Middle English*. Tokyo: Nan'un-do.
- Trnka, Bohumil. 1930. *On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden*. (=Travaux du Cercle Linguistique de Prague, 3.) Prague: Jednota Československých Matematiků a Fysiků.
- Visser, Frederikus Theodorus. 1963–73. *An Historical Syntax of the English Language*. 3 parts in 4 Vols. Leiden: E. J. Brill. [Cited as Visser; HS]